



キツネ顔
の男



川崎ゆきお

キツネ目の男。昔あった犯罪事件の犯人像ではない。紛らわしいので、それを避け、キツネ顔の男と社内では呼ばれている。

では、どういう男なのだろう。

顔は確かにキツネに似ているが、それを言い出すと、人の顔はキツネかタヌキになる。どちらかに似ている。だから顔付きではなく、性格を差している。この男、キツネ目というほど目尻が釣り上がっていない。

ずる賢い男で、悪く言えばそうなるが、よく言っても要領がいい……となる。

これは何か。

この小賢しく、要領がよく、ずるい男に付いていけば、安全だということだが、誰にでも出来ることではない。

社で大きなことが決まったとき、困ったことになった。これからどういう風にするのかが分からないとき、キツネ顔の男の行動を見る。巧く立ち回っているのだ。

なるほどそういう風にすればいいのかと、他の社員も思うのだが、なかなか実行できない。この男だけが出来ることなのかもしれない。

「彼かね」

「はい、相当の切れ者です」

「切れる奴は他にもいる。しかし、三十をすぎても、まだ平だろ」

「その年で係長になるのは希ですよ」

「そうだなあ、しかし、それほどの切れ者なら、なっているもおかしくない。だから、大した者じゃない」

「そういうことで、私が推薦したわけではありません。専務の要求はそれではないでしょう」

「ああ、社のピンチで同業社も危ない。我が社だけではないからね」

「そこですよ」

「何処だ」

「だから、あのキツネ顔は、その手の切り抜け方が巧いのですよ」

「そこに当てはめるか」

★

キツネ顔の男は重役室に呼ばれた。

「緊急危機プロジェクトを立ち上げる」

「はい」キツネ顔の男は感情を殺した声で答える。

「その室長は僕が兼任する。分からないように、別の役に着く」

「統括ですね」

「さすが察しがいい」

統括とは広範囲のマネージャーのようなものだ。

「早速だが、切り抜ける方法はあるか」

「あのう」

「何かね」

「私もその室員になるのですか」

「駄目か」

「はい」

「今いる総務では忙しいだろう。ここで専念してもらいたい」

キツネ顔の男はしばし黙った後「意見だけでは駄目ですか」と言った。

「どういうことだね」

「一言、言うだけで、もう私の仕事は終わります。そんなプロジェクトに専念しなくても」

「では、一発で決まるのか」

「はい、まず、そんなプロジェクトはすぐに廃止してください」

「何だ、それは」

「そういう部署を作った瞬間、もう煙が見られてしまいます」

「極秘のプロジェクトだ」

「漏れます。第一私に話したじゃないですか」

「君が漏らすと」

「私じゃなくても、分かりますよ」

「何でもいい。切り抜ける方法を出してくれ。それを聞きたい」

「まず、統括に意見がなければ駄目です。どうやらないようですから、誰かの案が採用されると
思います」

「うむ、それで」

「専務はその案に従えるとは思えません」

「いい案なら従うよ」

「まず、専務にその資質がない。だから、その下では無理です」

「君は本当に社内での立ち回りが巧い社員なのかね」

「私は普通に仕事をしているだけです」

「じゃ、続けなさい。聞きましょう」

「無理です。そんな方法はありません」

「何だ、それは」

「もう手遅れです。というより時代でしょうねえ」

「その足音が近付いておるのは分かっておる。だから、手を打ちたいのだ」

「その方法を私などに命じるあたりで、もう終わっていますよ」

「君！」

キツネ顔の男は部屋から立ち去った。そして社からも去った。

早い目、早い目がコツのようだ。

その後、早い目の男と呼ばれるだろう。

